

子育て終わって個に帰る ～団塊世代の実像<人生編>～

担当：青木 (aokimi@sumitomotrust.co.jp)

団塊世代の中には、子育てや住宅ローン返済という夫婦共同プロジェクトを終えると、残りの人生を「個」として生きる人が少なくないようです。戦後民主教育を受けて育ち、上の世代ほど強烈な「男女の役割分担意識」を持たないことが、こうした生き方を可能にしています。今後は、必ずしも「夫婦」が中高年期の生活の単位ではなくなるのかもしれない。

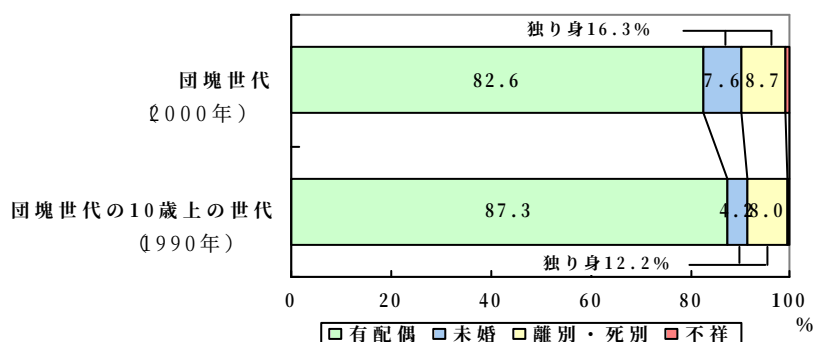
1. 添い遂げ意識薄れる

①6人に1人が独り身中年

子供の独立後は夫婦2人で過ごし、最期まで添い遂げる——という中高年期の標準的な生活スタイルが、少しずつ崩れ始めました。

50歳台前半時点における独身者（未婚の人+配偶者と離死別した人）の割合は、10歳上の世代（1990年時点）では8人に1人弱（未婚4.2%+離死別8.0%=12.2%）だったのに対し、団塊世代（2000年時点）では6人に1人弱（未婚7.6%+離死別8.7%=16.3%）となっています（図1）。団塊世代は10歳上の世代に比べ、未婚で50歳台を迎える人も、離婚（特に熟年離婚）した人も多く、結果として、独り身で中高年期を過ごす人の割合が高くなっているのです。

図1 50歳台前半時点の婚姻状況



資料：総務省「国勢調査」

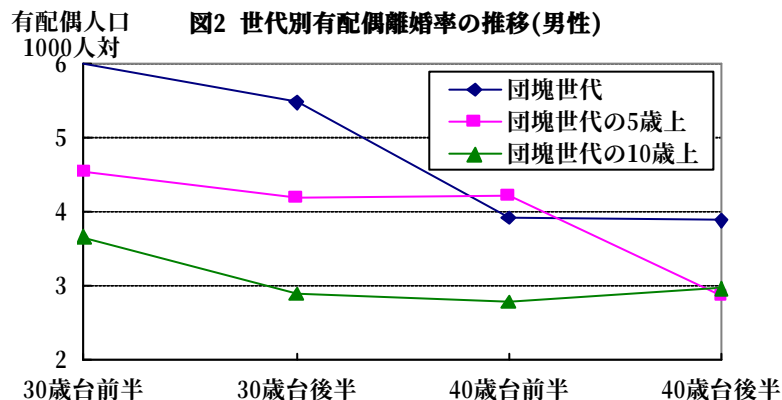
②増加する熟年離婚

有配偶離婚率（有配偶者 1000 人あたりの離婚者数）の推移を、団塊世代、団塊世代より 5 歳上の世代、同じく 10 歳上の世代で比べると、たった 10 歳ほどの年齢差でも、離婚に対する意識に格差があることがわかります（図 2）（図 3）。

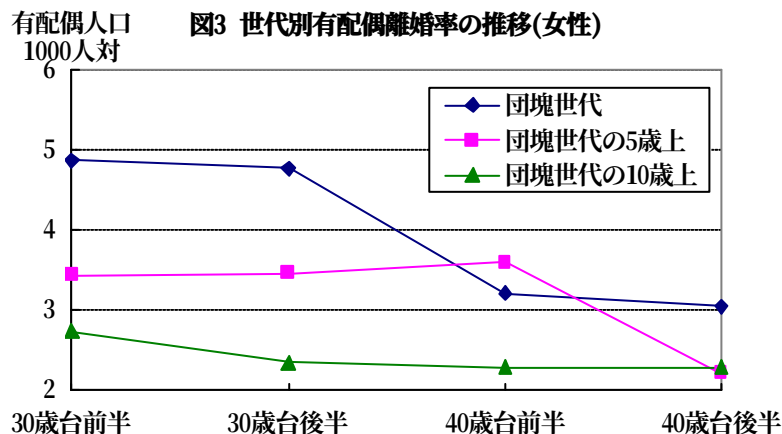
団塊世代より 10 歳上の世代の有配偶離婚率は、30 歳台前半～40 歳台後半を通じて概ね 1000 人中 3 人以下であり、この世代は基本的に「離婚するのは珍しいこと」「1 度結婚したら大抵は添い遂げる」という感覚を持っていると言えます。

団塊世代より 5 歳上の世代になると、30 歳台前半～40 歳台前半までは 1000 人中 3.5 人～4.5 人と、先輩世代よりは「離婚もひとつの選択肢」という意識が高まりますが、40 歳台後半には先輩世代と同レベル（3 人以下）まで低下します。「ここまで一緒にやってきたら、まあ最後まで」といったところでしょうか。

団塊世代の有配偶離婚率は、30 歳台の頃から 1000 人中 5～6 人と、5 歳上、10 歳上の世代に比べ高い上、40 歳台後半にも 40 歳台前半の水準（3～4 人）をキープしています。つまり、「20 年も一緒にやってきたんだから……」という添い遂げ意識は薄れ、熟年離婚に対する躊躇を感じなくなってきた世代と言えます。



資料：総務省「人口動態統計」



資料：総務省「人口動態統計」

2. 夫婦のままでも「個」が基本

離婚はしないけれども、お互いの「個人」としての面を第一に尊重し、それぞれが自分の居場所を持つ2人が同居するというスタイルを目指す夫婦も増えているようです。

最近の中高年世帯の住宅建替え・改装においては、夫婦別寝室や、夫婦それぞれの趣味部屋（夫のオーディオ部屋、妻のアトリエ等）といった個人空間を充実させるオーダーが少なくないそうです。また、夫婦別々の墓に入りたいと考える人も増えています。

家を買う、子供を育てる、住宅ローンを返済する等など、夫婦としてやるべきことをやり終えた後は、「夫婦単位の人生」から「個人単位の人生」へと意識を切り換えるわけです。

3. 女だって仕事 男だって家事

団塊世代が中高年期を個人として生きてゆくことを可能にしている理由のひとつは、この世代の男女が、仕事（経済力）と家事（日常生活力）の面で互いに自立しようという点です。

団塊世代は、彼らより少し上の世代までが抱いていた「男は仕事・女は家庭」の概念が崩れはじめた世代ではないでしょうか。戦後民主教育（男女平等教育）を受けて育った初めての世代で、女だって仕事をしたいし、男だって少しは家庭のことをこなす（少なくとも「家事なんかやったら男の沽券にかかわる」といった意識は上の世代より薄い）という世代です。

仕事に特化する夫と家事に特化する妻という組み合わせが減り、必ずしも互いが補完しあわないと生きていけないわけではない——という事実が、団塊世代が中高年期を個人として生きてゆくことをあと押ししています。

①働く女性・働きたい女性ともに増加

実際に「働くオンナ」がグンと増えるのは、もう少し下の世代になってからですが、団塊女性の現在の労働力率*は10歳上の女性が50歳台前半だった時より3.2%上昇して66.2%に、就業率**も2.5%上昇して64.6%となっています（図4）。また、就業女性について、家事などの傍らに働いているのか、仕事为主なのかを見ても、団塊女性では仕事为主の人の割合が若干高くなっています（図5）。

団塊女性は、働きたいと考える人の割合も、実際に働いている人の割合も、おまけに片手間ではなく本格的に働いている人の割合も、先輩女性たちが50歳台前半だった頃より高いわけです。

*労働力率＝（就業者＋完全失業者）／人口……実際に働いているかは別にして、とにかく働く意欲のある人の割合

**就業率＝就業者／人口……実際に働いている人の割合

図4 50歳前半女性の就業状態

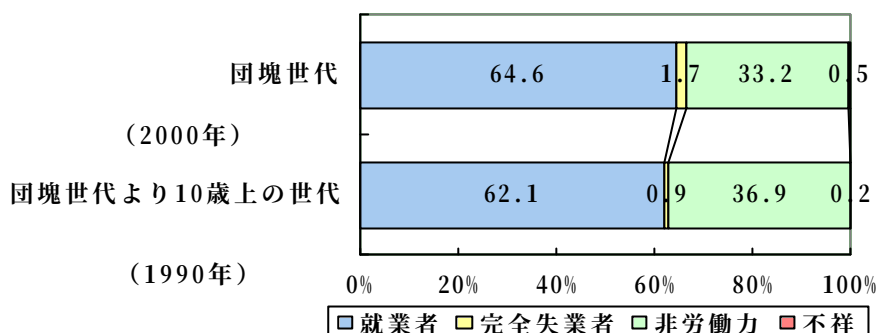
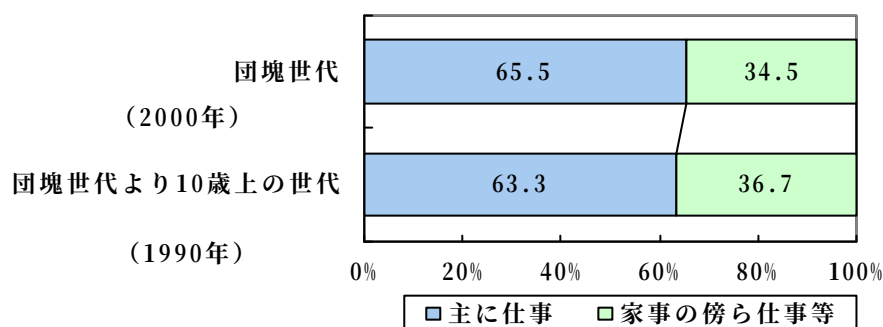


図5 50歳前半女性就業者の仕事の仕方



資料：（図4）（図5）とも 総務省「国勢調査」

②家事に前向きな中高年男性

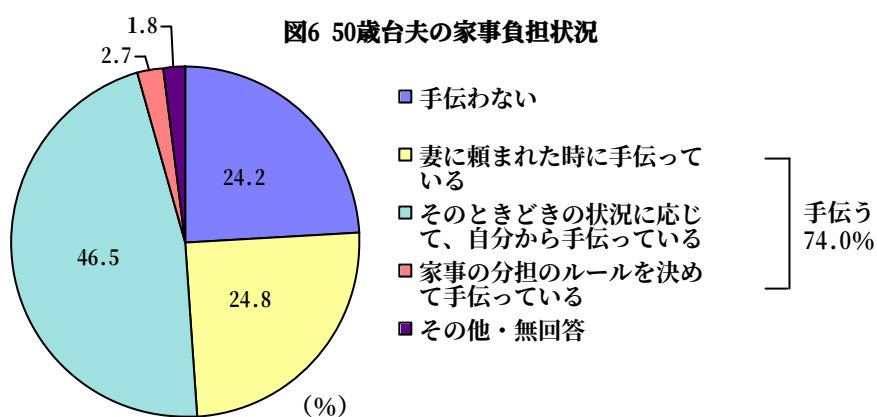
一方、男性の家事への関心・家事能力も以前よりずっと高まっています。

50歳台の夫の3/4は家事を手伝っており、しかも、「妻に頼まれて」より「状況に応じて自分から」手伝う人の方がずっと多いのです。「家事分担のルールを決めて」手伝っている（すなわち定期的・恒常的に家事をしている）人も2.7%います（図6）。

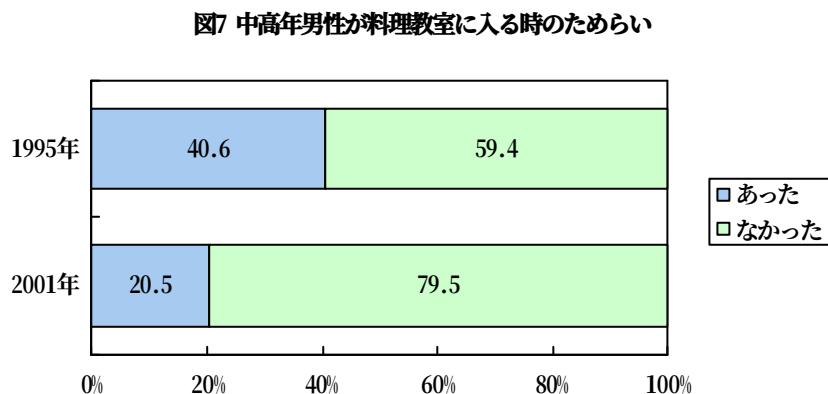
料理や家事についての意識調査を見ても、中高年男性が家事に対してより前向きな姿勢になっていることが明らかです。料理教室に入ることへのためらいが減り（図7）、入った理由も、ほぼ自立心（自己防衛心？）オンリーだったのが、「妻を助けたい」「趣味のひとつとして」等多彩になってきています（図8）。また、洗濯・掃除など料理以外の家事も身に付けたいと思う人が増加しています。

料理教室では、近年、男性の受講がかなり増えていますが、男性専用コースを設けたり、料理を始めたい男性が参加しやすいように、数回連続受講が原則のコースで 1 回のみの受講を受け付けたりといった教室側の工夫も奏功しているようです。また、ある自治体では、男性が家事や育児に自然に取り組めるきっかけ作りとして、月に 1 回程度男性が家事を率先して行う「主夫（おやじ）の日」の設置を決めたそうです。

このような、男性が抵抗無く家事に親しめる環境作りにより、男性の家事意欲・能力はいっそう向上していくでしょう。



資料: ライフデザイン研究所「ライフデザイン白書2000-01年」



*料理教室を受講した50歳以上の男性100人強に対して実施したアンケート調査

資料: (図7)～(図9)とも バターホーム協会「60歳からの男性・料理と家事の実態と意識」

図8 中高年男性が料理教室に入ろうと思った理由（複数回答）

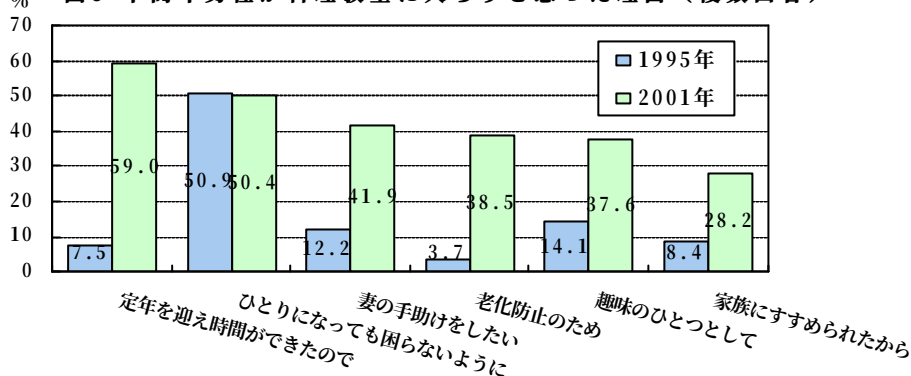
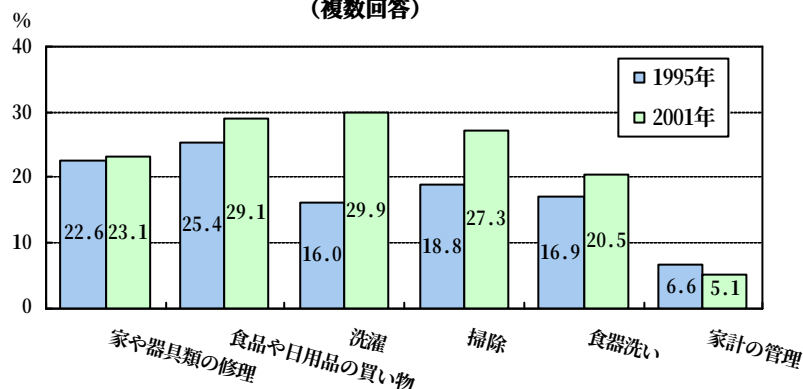


図9 中高年男性が今後身に付けたいと思っている家事（複数回答）



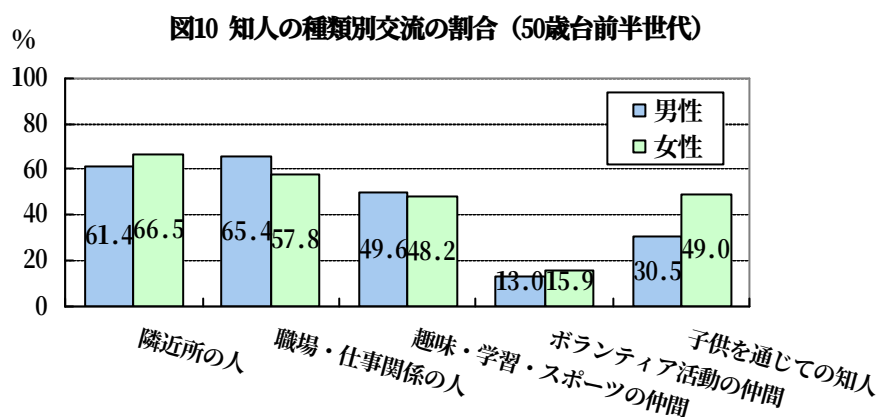
4. 高まる社会参加への欲求

離婚するにせよしないにせよ、2人 1 組意識が薄れ「個」を尊重する生き方を選択する場合、それぞれが「生きがい」や「仲間」を持っていることが大前提となります。

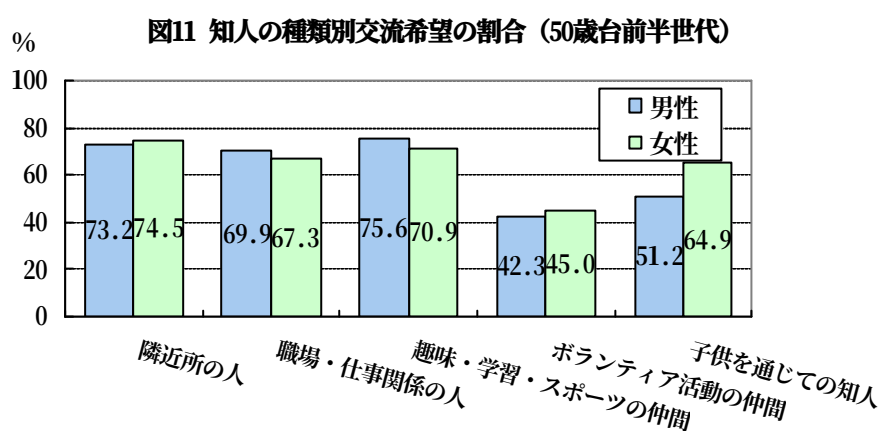
団塊世代に限らず、妻の方には、若いうちから近所付き合いや子供を媒介とした親同士の付き合いがあり、それらを元にしたネットワーク・グループができあがっている人が結構います。そんな妻と比べると、夫は仕事関係以外の知人との行き来が少なく、退職するとひとまず「居場所」がなくなる人もいそうです（図 10）。

人はそれぞれ、いろいろなジャンルの知人や仲間を持っていますが、「交流したいと思っている」知人・仲間と「実際に交流している」知人・仲間は、若干異なります（図 10）（図 11）。50 歳台前半男性では、その格差が相対的に大きいのは、「趣味・学習・スポーツの仲間」（格差 26.0%）と「ボランティア活動の仲間」（同 29.3%）であり、この 2 つをこれから付き合いしていく（作っていく）仲間の中核として考えているようです。

ここ数年、趣味のサークルに入る（作る）、ボランティア活動を始める、地域で仲間を作るといった活動が、団塊世代男性の中で活発化しているのは、時間的にゆとりができたという理由以外に、こうしたな事情も大きく影響していると思われます。



* 「よく行き来している」 + 「ある程度行き来している」の合計



* 「よく行き来したい」 + 「ある程度行き来したい」の合計

資料：(図10) (図11) とも 内閣府「国民生活選好度調査H12年」

※本資料は作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。